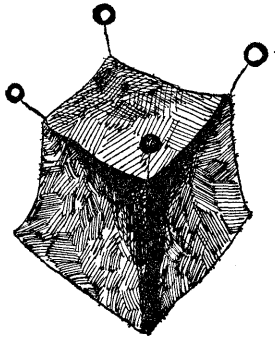

舘　かおる

夏の夜は彼岸と此岸をへだてる扉が静かに開く気配がする。思えばこの一年余の間に、様々の分野で活躍した多くの女性たちが他界した。一九八〇年の二月には、日本のキュリー夫人とも称された女性物理学者湯浅年子が、長年住み慣れたパリで逝った。五月には新劇女優として著名であった東山千栄子や宝塚歌劇団の天津乙女が逝き、あらためて人々にその舞台での姿を懐しく思い起こさせたものである。また混血児の母といわれた、エリザベス・サンダース・ホーム園長の沢田美喜がスペインのマヨルカで客死した。七月には料理研究家の江上トミ、あのにこやかな笑顔と話しぶりを覚えている方も決して少なくないであろう。そして十一月には婦人運動の理論家として名高かった山川菊栄が満九十才の誕生日の前に逝き、シャンソン歌手の越路吹雪もその若さを惜しまれながら去っていった。今年の二月には婦人政治家の市川房枝が八十七才の生涯を閉じたことは、まだ私たちの記憶に新しい。

歴史が二十一世紀に向かって大きく転回し始めたよう

な、そんな動きを感じさせる訣別の時が続いた。いつの世にも残された者たちは、命ある限り自らの火をともし続けて生きていかなければならない。私たちの前を歩いてきた女性を礎として。仕合わせなことに、彼女たちの多くは贈り物を残してくれた。自伝、そして珠玉のような言葉。夏の静謐の中で私たちは数々の魂と出会うことができる。

市川房枝『市川房枝自伝—戦前編』
（新宿書房　一九七二年）

市川房枝は後年、婦人運動に生涯をかけた動機を聞かれると、夫の横暴に我慢して働く母の姿に理不尽な思いを抱いたからだと語っている。愛知県の農家にうまれ、働きながら勉強し続けた若き日の房枝の姿は、その母の無念さをはらすためのものだったのかもしれない。そして平塚らいてうとの新婦人協会の活動、アメリカでの生活、帰国してからの婦選運動、市政浄化運動、そして戦時下の婦人時局研究会の活動と、彼女は休むことなく行動し続けた。本書は戦前までであるが、戦後の彼女の活動もまたその上に築かれていた。四十一才の誕生日に、自らを常に第一線におき、運動を続けることの辛さ淋しさをさりげなく語る彼女の言葉は、ふいに私たちの胸をつく。彼女が生涯突き動かされ続けたものが、一体何であったのかを、私たちは簡潔な文章の行間に汲み取らねばならないであろう。そして市川房枝が追求し、実践してきた「女性と政治」について考えてみる時、氏の生涯はあらためて歴史の中で検討されねばならないであろう。なおこのほど「八十七歳の青春」と題する氏の長編記録映画が制作された。白髪と深いしわに刻まれた彼女が、暖かくさっぱりとした声で自らの生涯を語り続ける姿に、少なからぬ感動を抱く方もいるかもしれない。

山川菊栄『おんな二代の記』
（平凡社・東洋文庫　一九七二年）

市川房枝を実践の人とするならば、山川菊栄は理論の人であるとは高群逸枝の言である。氏は、婦人問題や労働運動の理論家としては勿論、随筆家としても類いまれな才能を有していた。それらはみな豊かな人間性に支え

られた彼女の知性の発露に他ならない。彼女のそうした魅力が最もあらわれているのが、母千世と娘菊栄の生涯を綴った、この『おんな二代の記』である。母千世は自分が育った頃の水戸の様子だの、若い時分、東京に出た頃の思い出話など繰り返し娘の菊栄に語ったという。それを記した「ははのころ」には、幕末から明治の初期にかけての日本が、一人の女性の確かな眼で描き出されている。そして「少女のころ」から昭和の敗戦までの菊栄の半生には、自ら信じた社会主義思想の理論と実践についての省察があり、同志や近隣の人々との交友が描かれている。その人間描写には鋭い観察力と知的ユーモアがあふれている。また子供の頃新聞が好きで、祖父から古新聞を贈られたという逸話のある菊栄は、常に歴史の動きと、その中に生きる人々への目くばりを忘れることはない。私は本書を読むたびにそうした新たな発見をして、その奥行きの深さに驚ろかされる。近代日本の「女性と歴史」について考える際の好著の一つであろう。なお一九七九年には『山川菊栄の航跡ー「私の運動史」と著作目録』（ドメス出版）が刊行されており、現在岩波書店で『山川菊栄選集』も制作中である。

沢田美喜『黒い肌と白い心』

（日本経済新聞社　一九六一年）

沢田美喜が混血児の母となる決意を抱いてエリザベス・サンダース・ホームを創設したのは、昭和二十二年美喜四十六才の時であった。三菱本家岩崎久弥の長女に生まれ、外交官に嫁いだ氏のそれまでの人生は、自由で華やかなものであった。だが彼女は早くから聖書にひかれ、イギリスの孤児院を訪れた時には、残りの人生を孤児救済に捧げることを誓うのである。その時から十八年後、日米両国の妨害や世間の迫害と戦いながら、エリザベス・サンダース・ホームを創設し今日に至るまで築き上げてきたその信念と努力には誰しも敬意の念を抱かざるを得ないであろう。この仕事を通して結ばれた、作家パール・バックや歌手ジュセフィン・ベーカーとの交遊も感銘深い。一九八〇年に出版されたホームの子供達の思い出を綴った『母と子の絆』（PHP）のあとがきに、氏はこう記した。

「私は三十三年の間、花束をつくりつづけてきました。

……弱っていた花達は美しく生きかえりました。或る花はその葉かげにかくしていたトゲで私のゆびを刺しました。……三十三年の年月の流れた今日、私は私の花束の美しさに目をみはりました。……私は長生きをしてよかったとつくづく思いました」

こう記して一ケ月後、氏は私たちに「母と子」と「女性と福祉」について、重い問いかけを残して、そのダイナミックな生涯を閉じたのである。

湯浅年子

『パリ随想　ら・みぜる・ど・りゅっくす』
『続・パリ随想　る・れいよん・うえーる』
『パリ随想3　むすか・のわーる』
（一九七三年、一九七七年。一九八十年　みすず書房）

最後に自伝ではないが、女性物理学者の随想を紹介しよう。『パリ随想』、『続・パリ随想』における日本とフランスの文化への省察、科学と人生、女性と科学などについての詩情豊かな文体で展開される氏の思索は、すでに多くの人々の心を魅了している。没後にまとめられた『パリ随想3』は、最後の随筆となった「日本訪問記」と、氏の思索の原点ともいえる「黒葡萄（むすか）」と「〝離脱〟の詩」とから成っている。初期の二編は、女性が学問を続ける機会がほとんど閉されていた戦前の日本社会で、自らの可能性と戦いながら限られた道を切り拓いていった彼女の思いが語られていて深い感動を呼ぶ。文末の山崎美和恵氏による解説は、教え子の眼を通してみた湯浅年子その人の姿が示されており、心あたたまるものとなっている。そしてあらためて彼女の生涯に想いをはせる時、私たちは再び『パリ随想』のあとがきとして記された、氏の「自伝」を手に取らざるを得なくなるであろう。そこには病弱な子供時代をおくった氏が科学の道へのやみがたい気持にかられて渡仏するまでの姿が描かれている。氏はその中で「みぜーる・ど・りゅっくす」という草の名をこの書の名にして私の一生の要約としたいと記している。その草の名の意は、「ぜいたくなみじめ草」。そうした氏の生涯と思索の軌跡は、私たちが「女性と科学」を考える時決して見過すことができぬものであろう。

（お茶の水女子大学女性文化資料館）